

シュトゥットガルトの「光る」ツアイスII型投影機

2月の初旬、プラネタリウムの調査のためにドイツに行き、その一環としてドイツ南部にあるシュトゥットガルトのプラネタリウム館を視察訪問しました。フランクフルトからドイツ鉄道の高速列車で約1時間半、人口約60万人の街にあるシュトゥットガルト中央駅は大きなターミナル駅です。この駅のすぐ近くに、目的の施設「プラネタリウム・シュトゥットガルト」(写真1)があるのですが、いま駅周辺は大規模な再開発工事が進行中。そのため大きく迂回する仮歩道を歩きます。そして、ようやく見えてきた建物もすぐそばまで地面が掘り起こされていました。

プラネタリウム・シュトゥットガルトは1977年の開館。建物はピラミッド型で、その中央が直径20メートルのプラネタリウムドーム。その周囲にはチケット売り場やコインロッカー、展示物などが配置されています。金曜日の夕方に訪問しましたが、館内は人でいっぱい。大人の割合が多い印象ですが、家族連れも多く、人気です。



写真1. プラネタリウム・シュトゥットガルトの全景

シュトゥットガルトの「光る」ツアイスII型投影機

施設の入口近くには、プラネタリウムの展示コーナーがあります。置いてあるのは、かつて同館で活躍したツアイス社のII型とVI型投影機です(写真2)。

実は、シュトゥットガルトのプラネタリウムの歴史は大変古く、光学式プラネタリウムが発明された翌年には、シュトゥットガルト市議会が施設の建設を決定したといえます。そして1928年、ツアイスII型を導入した施設がオープンしましたが、1943年、戦争により施設は休館。投影機は解体保管されました。そして戦後は再開することなく建物が解体され、幕を閉じたのです。その後、長い時間を経て1977年に現在の施設がオープン。当時最新式のツアイスVI型投影機が導入されました。そ



写真2. プラネタリウムの展示コーナー。左がツアイスII型、右がVI型。

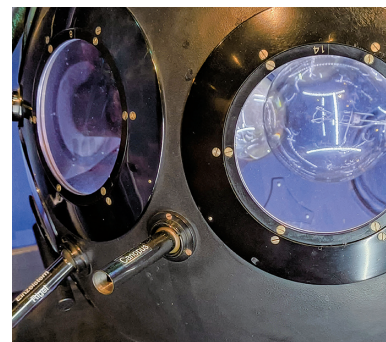


写真3. 恒星球の内部が見える様子と、単独の投影機。

して現在は、同じツアイス社のユニバーサリーウムIX型投影機が活躍中です。

さて、II型投影機の展示は、南半球の恒星球とそれにつながる惑星投影機群だけですが、なんと恒星球が「光って」いるのです。よく見ると、一部の恒星ユニットが取り外され、内部が見えます(写真3)。しかも中にはLED照明が付けられているので明るく、まるで恒星ランプが中から光を放っているように見えたのです。同様に惑星投影機群も照明されていて、印象的な展示方法でした。

同じII型投影機でも…

ところで、恒星球を見ると、大阪で見慣れたII型とは少し印象が異なります。原因は、大阪のII型にはない、恒星球から角のように出ている複数の円筒型の装置です。近づいて見ると「リゲル」、「カノーブス」などと説明がある(写真3の左下)ので、一等星投影機のようなようです。一方、古いツアイス社の資料を帰国後に見ると、シリウスと星雲星団投影機(全部で18個)と書かれていて、見解が異なります。現地で詳細を確認できなかったため、残念ながら本当のところは謎のまま、今後の課題となりました。

日本のプラネタリウムの故郷を想う

さて、筆者が見学した投影のテーマは「オーロラ」。全編オート番組で、約50分間のうち最初の15分は季節の星空の紹介。北斗七星と北極星、冬の星座、秋の星々などを次々と紹介していきます。そして太陽の年周運動に続き緯度変化で北へ。いよいよオーロラの解説です。イエローナイフなどで撮影した動画をたっぷり見せ、オーロラの伝説や科学的原理もしっかり紹介。楽しみ、かつ学べる内容と構成はとても見ごたえのあるものです。

観覧しながら、個人的には、大阪が作る番組スタイルとよく似た印象を受けました。それもそのはず。1937年、日本初のプラネタリウム施設として開館した電気科学館では、開館前にスタッフがドイツの各都市の施設で投影を見学し、自館のプログラム構成の参考にしたからです。今回の投影を見て、現在まで続く大阪の投影スタイルの原点がいまもドイツに息づいていることを実感しました。

嘉数 次人(科学館学芸員)